

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03118

研究課題名（和文）虫嫌いを緩和し多様な生きものとの共存・共生意識を育む保育実践プログラム開発

研究課題名（英文）Development of a practical child education program to alleviate fear of insects and foster awareness of symbiotic coexistence with diverse living creatures

研究代表者

藤崎 亜由子（FUJISAKI, Ayuko）

奈良教育大学・学校教育講座・准教授

研究者番号：50411690

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「多様な生きものとの共存・共生」という視点から幼児期の自然教育の意義を探究した。特に、子どもが自然と出会うためのインタフェースとしての「保育者」に注目した。また、自然と出会うための入り口かつ妨げともなる「虫」に注目した。幼児を対象として虫への好き嫌いを尋ねた調査、保育者や学生を対象とした質問紙調査の結果を踏まえて、虫嫌いを緩和する保育実践プログラムの開発を行った。特に、虫好きな子どもとのかかわりが、保育者の虫への苦手意識を緩和させ、共存意識を高めることに注目したプログラムを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

虫への苦手意識が就学前に生じること、特に女児で虫への苦手意識が増加することをデータで示し、虫嫌いが女児に多いことについての仮説を提示した。保育者の虫への苦手意識の実態について調査を行うとともに、虫への苦手意識が緩和されるプロセスについて検証した。調査を踏まえて、虫への苦手意識を緩和させることに注目した保育実践プログラムを提示した。さらに、実際にプログラムを実施してその効果を検証した。開発した保育実践プログラムは、保育者養成校での授業や、保育者を対象とした研修などにも応用できるだろう。

研究成果の概要（英文）： This study explored the significance of nature education in early childhood from the perspective of "coexistence and symbiosis with diverse living things. In particular, we focused on the "teacher of childhood education and care" as an interface for children to encounter nature. We also focused on "insects," which are both a gateway and an obstacle to children's encounter with nature. Based on the results of a survey of young children asking about their likes and dislikes of insects and a questionnaire survey of teachers and students, we developed a practical childcare program to alleviate their dislike of insects. In particular, he presented a program that focuses on how involvement with children who like insects can alleviate teachers' dislike of insects and increase their awareness of coexistence with insects.

研究分野：発達心理学、保育学、こども学

キーワード：保育内容「環境」 昆虫 保育 環境教育

1. 研究開始当初の背景

幼児期の原体験は、生涯にわたる生きものへの態度や意識を形成し、科学的思考の土台となる重要なものである一方で、世界的にも「(自然) 体験の消滅 the extinction of experience」が進んでいる (Ryle, 1993)。自然との直接的で個人的な接触の機会の低下は、自然への関心そのものを喪失させるという悪循環を生み出し、健康上の問題はもとより、生物多様性の保全等に深刻な影響をもたらすと世界的にも危惧されている (Soga, 2016)。

そのような現状の中、幼児教育施設において子どもたちの自然体験を保障していくことも重要な課題として認識されており、現行の幼稚園教育要領等（平成 30 年施行）には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 1 つとして、「自然との関わり・生命尊重」の項が設けられている。しかし、その指導を行う保育者もすでに、生きものと触れあった体験が乏しく、身近な虫や雑草も知らない現状がある。平成 17 年の中央教育審議会の答申においても、幼稚園等施設の教員等の今日的課題として、「幅広い生活体験や自然体験を十分に積むことなく教員等になっている場合も見られる。そのため、自らの多様な体験を取り入れながら具体的に保育を構想し、実践することがうまくできない者（中略）も少なからずいるとの指摘もある」と述べられている（中央教育審議会, 2005 第 4 節）。

研究代表者および研究分担者は、養成校で保育者の養成に携わり、保育内容「環境」などを中心に担当してきた。その中で、養成校の学生の自然体験の乏しさ、関心の薄さを見てきた。さらには実習に赴く学生の中には、幼児がもってくるダンゴムシやミミズに驚き、戸惑いを隠せず時には悲鳴をあげて逃げる場合があることも目の当たりにしてきた。虫は、自然と関わる際には避けて通ることのできない存在であり、虫嫌いを緩和することが自然体験への入り口としても重要である。

これまで、多くの保育者が虫への苦手意識をもっている実態はいくつかの研究で指摘されてきたが（林・田尻, 2005；平田・小川, 2017）、その虫への苦手意識をいかに緩和できるかについてはまだ十分に研究されていない。また、保育者が虫についてどのような認識をもっており、虫への認識がどのように変化していくのかを検証した研究は少ない。

2. 研究の目的

本研究は、幼児期における自然教育の意義を「多様な生きものとの共存・共生」という視点から探求するとともに、「園庭の自然との出会いを創出する保育」の実現にむけた保育実践プログラムと教材の開発を目的としている。特に、子どもが自然と出会うためのインタフェースとしての「保育者」に注目するとともに、自然と出会うための入り口かつ妨げともなる「虫」の存在に注目した。身近な自然の喪失とともに、保育の場における原体験の重要性は増しているものの、保育者の多くもすでに自らの自然体験が乏しい世代であり、かつ保育者養成カリキュラムには専門的な生物教育を受ける機会も乏しい。また、多くの研究が指摘するように、保育者の「虫嫌い」の傾向は顕著であり、子どもたちの自然とのふれあいを妨げる要因ともなっている。このような現状を鑑み、本研究は特別な場で特別な教育を受けるカリキュラムではなく、園庭という身近な自然の中で、保育者も子どもも共に一から学んでいけるように、虫嫌いを緩和するとともに、虫を入り口として自然や生命の豊かさや多様性への関心と関わりを醸成する保育実践プログラムの開発を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究が追求する課題とそのプロセスは大きく以下の 3 つに分けられる。

① 虫への苦手意識の緩和プロセスの解明

- 保育者への質問紙およびインタビュー調査
- 学生（保育者養成校）を対象とした質問紙調査

② 保育者と子どもたちが園庭で共に学べる保育実践プログラムと教材の開発と評価

- 保育者や保育者を目指す養成校の学生を対象とした「虫を主題とした保育実践プログラムと教材」の開発

③ ②の検証 特に虫との共存・共生意識、虫の教育的意義についての意識、虫への好き嫌い感情の変化から

4. 研究成果

（1）虫への苦手意識の緩和プロセスの解明

① 幼児期の子どもたちの虫への苦手意識について

関西の N 幼稚園の園児 91 名に園庭に生息する 15 種の虫について、①虫の名前を知っているか、②見たことがあるか、③好きかを尋ねた。その結果、男女とも名前の認識、目撃体験については年少、年中、年長と学年が上がるほど増えていた。一方で、「好き」との回答は年長女児では少なくなっていた (Figure 1, 2)。

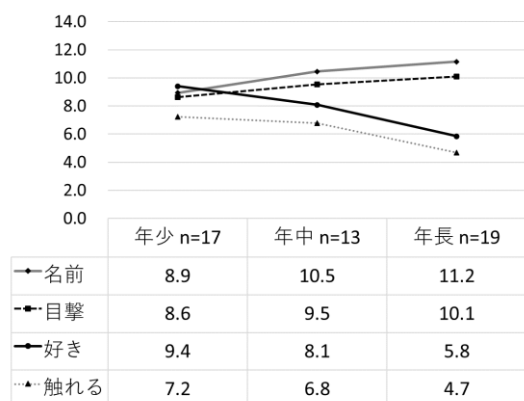
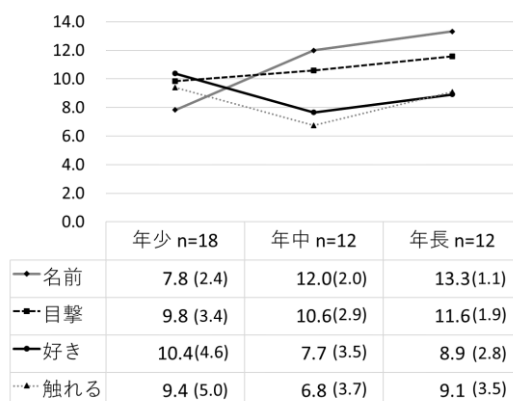


Figure 1. 女児：学年ごとの平均値



※ ()内は標準偏差

Figure 2. 男児：学年ごとの平均値

以上の結果を踏まえて、幼児期に進行する虫への嫌悪感、特に女児での嫌悪感の増大にはどのような要因が絡んでいるのかについて仮説を提唱した。詳しくは藤崎 (2019) を参照。先行研究からは、虫嫌いには生得的な要素がありつつも、虫への嫌悪が学習される側面もあるといわれている (Arrindell et al, 1999)。その場合、子どもたちが日々通う保育の場における教育や家庭における関わりが果たす役割は大きいだろう。

②保育者および保育者養成校の学生の虫への苦手意識について

保育者 283 名（女性 214 名、男性 8 名）に質問紙調査を行い、全般的に「虫が好きか」「虫が苦手か」について、7 件法で尋ねた結果 (Figure 3, 4)、「好き」の平均得点は、保育経験年数 20 年以上 > 10 年未満 = 10 年～20 年未満であった。「苦手」は 20 年以上 < 10 年未満 = 10 年～20 年未満であった。以上の結果をまとめると、保育者になることによって、虫への苦手意識が減少し、虫を少なからず好きだと感じるように変化していくといえるだろう。ただし、年代の影響についても考慮しながら、慎重に検討する必要がある。

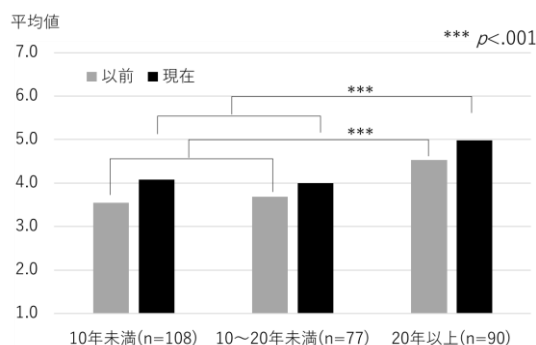


Figure 3. 虫が「好き」か（保育経験年数×保育者になる前後での比較）

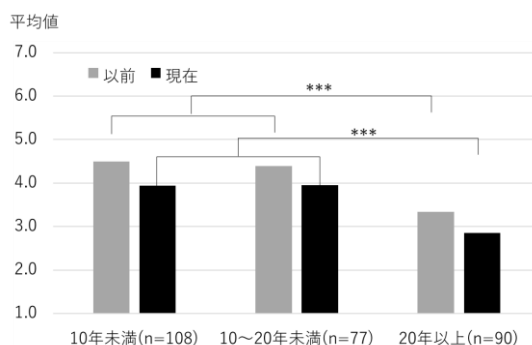


Figure 4. 虫が「苦手」か（保育経験年数×保育者になる前後での比較）

保育者へのインタビューの結果でも、もともと虫が苦手であったという保育者が、保育の場で悪戦苦闘しつつも馴染んでいく様子が語られた。例えば、A 保育者は「触れることも何もできなかった。見るのも嫌だしみたいなのから、「お仕事だから、「きゃー」とか言ってられないなと思って、子どもの前ではもうそういう姿は一切見せちゃ駄目だと思って」と取り組む中で、4、5 年かかって虫嫌いを緩和していった。また、苦手意識は変わらないものの、子どものために我慢をしているという保育者もあった。

③虫への苦手意識が緩和した要因について

苦手意識が緩和されていく要因について、より詳細に調べるために保育者 283 名（女性 214 名、男性 8 名）に質問紙調査を行った。保育者が「虫嫌い」を緩和できた、もしくはより「虫が好きになった」とする要因について複数選択式で回答を求めた結果、最も多かったのは、「虫好きの子どもたちとの出会い」であり 8 割を超える保育者が選択していた (Figure 5)。また「虫と関わることで子どもたちが成長していく姿をみたこと」が次に多く選択されており、子どもの存在が大きく影響していることが示された。

自由記述の回答には「子どもが、虫とかかわることによって生まれることばや集中する姿に感動することが多かった (65 歳以上)」「子ども達からも虫の知識を教えてもらったりしていると、自然に興味をもつようになった (30 代前半)」と、子どもの姿から学び、保育者自身の自然との関わりが広がっていく様子が示された。また、虫が苦手だった保育者も、「子どもにこわくはないと思ってもらうために、自分にもこわくないことを言い聞かせた (20 代前半)」「保育者は、大きな環境のひとつ。根性で、笑顔で接するようにした (30 代後半)」「仕事だと割り切る (30

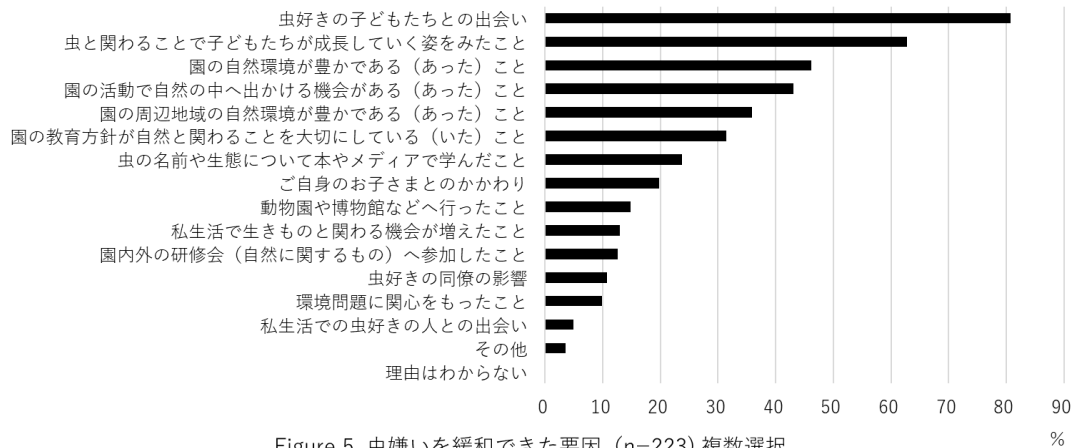


Figure 5. 虫嫌いを緩和できた要因 (n=223) 複数選択

代後半)」などと、子どものためにと奮闘する中で、「苦手」意識が緩和されていく様子があった。また、子どもとの関わり以外では園や園周辺の自然環境の豊かさ、園の教育方針が自然との関わりを大切にしていることなどが挙げられていた。

一方で、少数ながら虫への好きという気持ちが「低下」した人も 23.9%いた。また、保育者になった後に「虫が嫌い」になったと回答した人も 9 名 (8.0%) いた。虫がより嫌いになった理由としては、「子どもが虫に触れ、はさまれたり、かまれたりする姿を見ると、触れなくなった。近くで虫を見ることが増え、気もち悪さを感じるが増えた (30 代前半)」「カマキリを飼育中、ケースから出した時に自分の方に向かってとんできて、びっくりし、それから苦手になった。カマキリに脅威を感じた。(30 代前半)」など、子どもや自分に害を及ぼしそうだということが理由となっていた。このような保育者へのケアも今後の重要な課題であろう。

(2) 保育者や保育者を目指す養成校の学生を対象とした「虫を主題とした保育実践プログラムと教材」の開発

(1) の研究を踏まえて、保育者養成段階ならびに保育者への研修として、どのようなプログラムを実践できるのかを検討した。多くの先行研究が指摘するように、自然の中で (in) の体験を重視しつつ、自然を知り (about)、自然のために何ができるのか (for) を考えることを盛り込み、保育の中で実践を構想できる力量を身に付けることをねらいとして構成した (Table 1, 藤崎, 2021)。構成要素としては以下の 7 つを取り上げた。(1)他の生きものとの関係の中で人間を知る、(2)園庭の身近な生きものに気付く、(3)園庭の生きものを知る、(4)生きもの同士のつながりを知る、(5)生きものの視点で世界や人間を捉える、(6)人間文化とのつながりを知る、(7)保育における「死」との出会いを考える。

Table 1. プログラムの構成と概要

タイトル	構成要素	概 要
①保育内容「環境」と幼児を取り巻く現代の課題	(1)(4)(5)	幼稚園教育要領をもとに、SDGsやESD とのつながりを考える。
②身近な自然との関わり：園庭の生きものに気付く	(2)(3)(4)	園庭に生息する虫に気づき、その生態や生きもの同士のつながりを理解する。危険な虫について知る。
③身近な自然との関わり：園庭の生きものを知る	(2)(3)(4)	虫の捕り方、危険な虫、応急処置について理解する。実際に大学内で虫捕りをする。
④身近な自然との関わり：園庭の環境を活かした保育	(3)(4)(5)(7)	捕獲した虫について共有し、解説を行う。
⑤身近な素材や自然物を用いた保育の実践Ⅰ	(6)(8)	自然物で作成した遊具や制作物を共有し、保育で活かせるアイデアや留意点を理解する。
⑥身近な素材や自然物を用いた保育の実践Ⅱ	(2)(3)(4) (5)(6)	宿題として、虫を捕獲し飼育観察して調べた上で生態や遊び方、育て方をまとめて発表を行う。
⑦子どもの発達と身近な環境との関わり	(8)	さまざまな保育施設の環境を知り、子どもが身近な自然と関わる環境と保育者の支援を考える。
⑧虫との関わりと文化	(5)(6)(7)(8)	人間文化と虫との関わりについて学ぶ。虫絵本についても実際に読んで体験し、保育へ活かす力を身につける。

また、Table 1 に示した構成要素を取り入れつつ、親子と一緒に自然を体験できるプログラム (もりっこ活動) を保育者養成校で実施した。このプログラムの特徴は、保育者養成校の学生が参加した親子とペアになって、学内の自然体験を提供するインタープリターの役割を担うというものである。(1) の調査からも、「子どものために」「子どもと一緒に」ということが、保育者の虫嫌い緩和に重要な役割を担っていることが示されている。もりっこ活動もそのことを念頭に展開された。

(3) 虫との共存・共生意識、虫の教育的意義についての意識、虫への好き嫌い感情の変化から

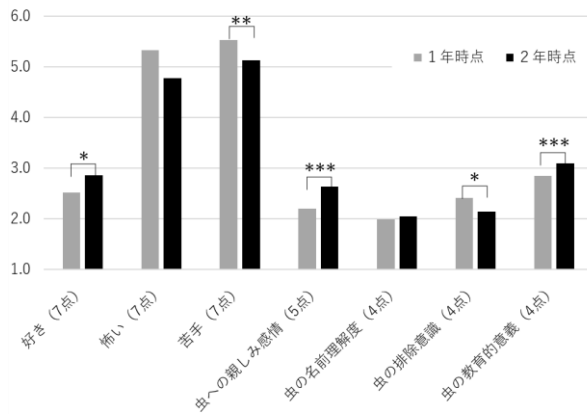


Figure 6. 各尺度の平均値の比較(n=77)

い学びへとつながっていくのかを検討することは今後の重要な課題である。

次に、「もりっこ活動」を含めたT大学での実践の効果検証を行うために、大学1年生時点とその1年後の時点(2年生の終わり)での縦断的な調査を行った(対象者77名)。虫に対する感情(好き、怖い、苦手)、虫への親しみ感情尺度、虫の名前の認識度、虫の排除意識、虫と関わることの教育的意義についての意識尺度について調査した結果、2年時には、虫への嫌悪感がやわらぎ、より親しみを覚える方向へと変化し、虫の排除意識は下がっていた(Figure 6)。また、虫の教育的意義についての認識も高まっていた。この結果は、横断研究によって、1年生と2年生を比較した調査でも確かめられた結果をより補強する形となった。

ただし、注意が必要である。2年生を対象に、入学してから現在までの意識や行動の変化について尋ねた結果では、自然への興味・関心が増えるとともに、日常でも自然との関わりが増え、環境問題への関心が高まり、虫の存在に気づいたり知識が増えるなどの変化を報告する学生は多いことが示された。しかし、実際に虫が怖くなくなった、好きになった、触れるようになったという変化は少なく、継続した支援が必要であることが示された。

虫への気持ちに影響を与えた要因だと学生が感じたものを複数回答で求めたところ、80%を超える学生が「生き物と出会った経験」「大学の自然環境」「子どもと関わる経験」「各論 環境・環境の指導法の演習や体験」の4項目を選んでいった。特に「子どもと関わる経験」としてもりっこ活動をあげる学生は多く、自由記述では「自分一人だとそんなに虫は好きじゃなかったが、子どもと一緒にゆっくり見ることで動植物の生きる姿を見つめることができた。」「虫は苦手だが、子どもの前では嫌だったがさわれたこと。虫がいても冷静に対応でき、むしろ自分から虫を探すことができた。」などが見られた。

さらに、保育者養成校の学生(N=13)が、教育実習にいくことが虫への意識(好き嫌いなど)を変化させるのかを質問紙調査で調べた。また、アリ、カメムシ、ミミズという3種類の虫と遊ぶ子どもに対して、どのようにかわるのかをロールプレイ形式で演じてもらった。子どもに対する言葉かけの内容を実習の前と後とで比較した。質問紙調査の結果、虫への苦手意識は、実習前と後とで大きく変わらなかった。一方で、虫の存在に気付くことや、触ることのできる虫、虫に関する知識は増えていた。また、言葉かけの分析の結果、実習後には子どもの気持ちに共感する言葉が増えていた。たとえば自分は虫が苦手であっても、子どもの気持ちに寄り添い、共感的に関わろうと努力している様子がみられた。

<引用文献>

- Arrindell, W.A., Mulken, S., Kok, J., Vollenbroek, J. (1999). Disgust sensitivity and the sex difference in fears to common indigenous animals. *Behaviour Research and Therapy*, 37, 273-280.
- 中央教育審議会. (2005) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申): 子どもの最善の利益のために幼児教育を考える.
- 林 幸治・田尻由美子. (2005), 「自然とかかわる保育」の実践的保育指導力の男女差について. 近畿大学九州短期大学研究紀要, 35, pp. 61-72.
- 平田豊誠・小川博士. (2017), 「幼稚園教諭・保育士志望学生の『虫』と『動物』についての意識調査」, 佛教大学教育学部学会紀要, 16, pp. 63-74.
- Ryle, R.M. (1993). *The thunder tree: lessons from an urban wildland*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Soga, M. (2016). Extinction of experience: the loss of human-nature interactions. *Frontiers in Ecology and the Environment*, 14(2), 94-101
- 田川一希. (2020), 虫の採集・観察を行う授業は、大学生の虫に対する嫌悪感を緩和するか? 宮崎国際大学教育学部紀要教育科学論集, 7, pp. 20-31.

(2)で実施したプログラムの効果を検証した。まずN大学の受講生13名を対象に事前事後で質問紙調査を行った。その結果、事前調査で虫が好きと回答したのは13名中3名であり、事後調査では6名と増えていた。事後調査では13名中12名が、最も印象に残ったのが「虫捕り体験」として回答しており、11名の自由記述には「楽しかった」と書かれていた。楽しかったとする感想には、「子どもたちが虫捕りを楽しいと思う気持ちが少しわかった」などがあつた。たとえ、短期間の体験でも、虫を捕獲したり見たり触ったりする体験は学生の虫嫌いを緩和する効果があるという(田川, 2020)。ただし、このような効果が継続するのか、また深

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤崎 亜由子、麻生 武	4. 巻 60
2. 論文標題 園庭に生息する15種の虫に対する幼児の理解の発達	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 91～102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.60.1_91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤崎 亜由子、廣瀬 聡弥	4. 巻 8
2. 論文標題 現代的課題を踏まえた保育内容「環境」の指導法 ―学生の虫嫌いを緩和し身近な自然と親しむ保育を目指して―	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要 = Bulletin of Teacher Education Center for the Future Generation	6. 最初と最後の頁 85～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013528	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本 栞、藤崎 亜由子	4. 巻 35
2. 論文標題 児童期の被養護体験が大学生の共感性に及ぼす影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 131～141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15117/00020182	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤崎亜由子・廣瀬聡弥	4. 巻 8
2. 論文標題 現代的課題を踏まえた保育内容「環境」の指導法：学生の虫嫌いを緩和し身近な自然と親しむ保育を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013528	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1．発表者名 藤崎亜由子
2．発表標題 虫の命で遊ぶ園児たち（４）：保育者の理解と関わり
3．学会等名 日本保育学会第75回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 山下久美・藤崎亜由子
2．発表標題 保育者養成校での学びが虫に対する意識に及ぼす影響
3．学会等名 日本保育学会第75回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松本陽子・藤崎亜由子
2．発表標題 自然と関わる保育のねらいと保育者の関わり
3．学会等名 日本保育学会第75回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 藤崎亜由子（企画：名須川知子）
2．発表標題 乳幼児期におけるESD/SDGsはどのように、何をめざすべきか：世界OMEFのESD Rating Scaleを手がかりに。
3．学会等名 日本保育学会第75回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 藤崎亜由子・麻生武
2．発表標題 園庭に生息する身近な虫に対する幼児の理解
3．学会等名 日本保育学会第74回大会発表論文集
4．発表年 2021年

1．発表者名 渡部美佳・藤崎亜由子・山下久美
2．発表標題 絵本にみる虫の表象（1）登場する虫の種類
3．学会等名 日本保育学会第74回大会発表論文集
4．発表年 2021年

1．発表者名 藤崎亜由子・麻生 武・島内 武・亀山秀郎
2．発表標題 園庭に生息する身近な虫に対する保育者の認識
3．学会等名 日本保育学会第73回大会発表論文集 PA7-3 p169-170
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤崎亜由子
2．発表標題 虫捕り遊びにおける子どものコミュニケーションの分析
3．学会等名 日本保育学会第72回大会 PB10-6
4．発表年 2019年

1．発表者名 Ayuko Fujisaki
2．発表標題 Children ' s Understanding of and Playing with Insects in Japanese Kindergarten.
3．学会等名 OMEP-APR in Kyoto Terrsa (国際学会)
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤崎亜由子，島内 武，飯島貴子，麻生 武，亀山秀郎，藤崎憲治
2．発表標題 幼児と身近な自然との出会いを創出する保育教材研究：園庭のむしあそび図鑑の開発
3．学会等名 関西環境教育合同研究大会2019
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤崎亜由子・山下久美
2．発表標題 虫嫌いを緩和する要因分析：保育者への調査から
3．学会等名 日本保育学会第76回大会発表論文集P-C-1-03
4．発表年 2023年

1．発表者名 山下久美・藤崎亜由子
2．発表標題 保育者養成校での学びが虫に対する意識に及ぼす影響
3．学会等名 日本保育学会第76回大会発表論文集P-A-7-08
4．発表年 2023年

1．発表者名 藤崎亜由子・山下久美
2．発表標題 自然と関わる保育の保育者効力感尺度の開発
3．学会等名 日本保育学会第77回大会発表論文集P-C-2-08
4．発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1．著者名 山下久美	4．発行年 2020年
2．出版社 全国公立幼稚園・こども園長会	5．総ページ数 82
3．書名 幼児教育じほう	

1．著者名 藤崎亜由子，羽野ゆつ子，渋谷郁子，網谷綾香	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 256
3．書名 あなたと生きる発達心理学	

1．著者名 藤崎亜由子，島内 武，飯島 貴子，麻生 武，亀山 秀郎，藤崎 憲治	4．発行年 2020年
2．出版社 昆虫と自然55(1)	5．総ページ数 5
3．書名 幼児期に虫と遊ぶことの教育的意義と保育教材開発：園庭のむしあそび図鑑の取り組みから	

1．著者名 藤崎亜由子・藤井 修・島本一男・亀山秀郎・片山知子・吉津晶子・名須川知子・西脇二葉・富田久枝・山村けい子・萩原元昭	4．発行年 2023年
2．出版社 かもがわ出版	5．総ページ数 160
3．書名 保育に活かすSDGs/ESD 第1章 乳幼児期におけるSDGs/ESD をめぐる保育の動き	

〔産業財産権〕

〔その他〕

生きものの関わりと子どもの発達 - 手のひらの中の命と出会う - https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/ebook/book051.html 奈良女子大学附属幼稚園 園庭のむしあそび図鑑 http://nara.mushizukan.com/

6．研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	渡部 美佳 (WATANABE Mika) (50597143)	和泉短期大学・その他部局等・助教 (42610)	
	山下 久美 (YAMASHITA Kumi) (80410158)	東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授 (32718)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協 力 者	麻生 武 (ASAO Takeshi)		

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	飯島 貴子 (IIJIMA Takako)		
研究協力者	藤崎 憲治 (FUJISAKI Kenji)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------